

自主シンポジウム 6

保育者の成長と保育実践③：保育者自身のライフヒストリーから考える

企画者 横川 和章（兵庫教育大学）

司会 石野 秀明（兵庫教育大学）

話題提供者 得能 公子（宝塚市長尾南幼稚園）

指定討論者 上中 修（兵庫教育大学附属幼稚園）

梶原 理絵（加古川市鳩里幼稚園）

【企画趣旨】

本シンポジウムは、「保育者の成長と保育実践」をテーマとした連続企画の第3回目に当たる。これまで「専門家としての資質を高めるために」（第54回大会）、「実践を支える思想的基盤」（第55回大会）を中心課題として、議論を深めてきた。従前の議論では、保育者としての専門性を支える諸条件を探ってきたが、今回は、今一度、原点に立ち返りたいと思う。つまり、保育者が、いかに子どもと共に生き実践を展開してきたのか、その現実の歴史に向かい合うことである。Bruner(1990)は、当事者によって語られる現実と、それが語り継がれ伝承される過程の重要性を指摘した。一人の保育者のライフヒストリーが、他の保育者たちの心身を根底から揺さぶるとき、保育実践は、別の場所で、新たな展開を見せることだろう。以上を踏まえ、本シンポジウムでは、3名の現場の先生方に登壇して頂く。三者三様のライフステージからの語りを重ねることで、生涯を展望した「保育者の成長」の可能性を探り当てることを目指す。さらに、フロアーとの議論を通じて「保育実践」の将来像について考察を深めてゆきたい。

話題提供者 得能 公子

私の歩んできた道は、何の計画もない道であった。にも関わらず、振り返ってみると、自分の技量に見合った仕事と出会うべくして出会っていた。そこに必然性でもあったかのごとく、しかし無理のない自然な流れの中で、保育者としての私らしさを形成し磨かれていっているように思える。時代の流れ、保育の流れに身を任せ、その折々に出会った子ども、保護者、同僚、上司から、保育者として生きる喜びや学ぶ楽しさを教えてもらいながら歩んできた。

●3日、3週間、石の上にも3年

1年目、「真っ白な私」がいた。一寸先が予期できない不安な日々、気がつけば5月病にかかっていた。色々と励まされたが、誰から見ても放っておけない頼りない新任保育者だったと思う。季節の移り変わりを子ども達と同等の視線で驚喜していた。

2年目、初めての公開保育。指導案は、当然たくさ

ん訂正が入った。子どもの姿が見えない、ねらいの不明瞭な、形式だけのもので保育をすることになった。

3年目、教育課程研究会、内容以前の問題。恐ろしく難しい研究会があるんだという認識だけが残った。

幼稚園とはこんなところと3年かかって漠然と掴んだ。「石の上にも3年」、何とか働けたのだからもう少しやってみようかなと、行く手に微かな光を感じながらの遅々とした歩みだった。

●保育観のベースは「人権尊重」

4年目、同和白書を書くことになり、それが私の保育観のベースとなった。一人ひとりの子どもを見つめる中で、今、保育者として何ができるかを真剣に考え悩むようになった。「命を慈しむ思いやりのある子どもを育ててゆきたい」「一人の子を核とした学級づくり」、保育者の使命について考えはじめた時期であった。

●初めての2年保育

8年目、初めての転勤。当時市内に1学級しかない4歳児の担任になる。4歳児の発達について何の知識もなかったことが、悲しい保育を招いてしまった。5歳児保育の「小さい版」をすればいいのかな？と勘違いしていた。入園早々、紙粘土とモールを与え、ケムシを作ろうとした。「ワァーできへん」と泣き出す子ども達。手先の不器用な子どもが多いんだと、自分自身の保育内容の問題に気付かない保育者であった。

失敗もあったが、2年保育との出会いは、後々「2年間の長いスパンで保育内容を考える」という私の持論を裏付けるものとなった。

●人生で一番忙しい年 充実感！

1989年の教育課程改訂を機に、私は運良く県レベルの資料づくりや県指定保育研究会などに関与することができた。保育内容が「保育者主導の活動」から「子どもが環境と関わって生み出す活動」へと転換されたことを早く実感でき、実践に活かすことができた。気がつけば、10年を過ぎた中堅の保育者になっていた。

「研究の醍醐味は、主題設定から実践記録まで全てを自分でプロデュースするところにある」と、当時の園長先生に指導を受け、実践研究三昧の日々に突入し

た。当初は苦しさや挫折感を多く味わった。しかし、次第に、何か視点を持って幼児に接し保育をすること、課題が明らかになっていくことが、楽しくてしょうがないと思うようになっていった。

1996年は人生で一番忙しい年となった。「自分の意志とは関係ない、この人ならという信頼関係の下に仕事はやってくる。人生の充実期だよ」と当時の園長先生に励まされた。1年間で3年以上の量の仕事をしたように思った。「人間やれば何でもできる」。あの恐ろしく難しいと思った教育課程研究会、その全国研究会で私が発表するなど誰が予想できたろう。自尊感情を育てる、2年間の保育内容を活かす、環境教育を積極的に保育に取り入れる等々、研究発表は自分の18年間の保育経験の歩みの集大成。大きな節目の年であった。

●担任から主査・副園長への脱皮

いつしか全学級・全職員に目を配ることが必要な年齢になっていた。19年目、保育カンファレンスやチームティーチングを行った。小学校への滑らかな接続を考え、幼小連携にも着手した。幼稚園教育を、一つの大きな枠組みで捉えられるようになり、実践と理論の両刀で保育ができるようになった。クラスの子とも達を「可愛い」というよりも、「愛おしい」と感じるようになった。その2年後、私は担任ではなくなった。

●ポジティブに新しい風を感じて

直接子どもたちに接して保育ができない立場。4月当初は幼稚園にしながら、転職をしたかのようで淋しさを感じた。「保育がしたい!」「私ならこうするのに!」と葛藤の日々が続いた。

幸い、副園長として赴任した園は新設園であり、今までの歴史がなく、まさにゼロからの出発だった。葛藤を感じながらも、ゆっくりと振り返り感傷に浸っている時間はない。自分の持っている力を最大限に発揮しなければならなかった。開園準備、施設設備の充実、PTAとの対応、行事の精選等々、生みの苦しみと生み出した喜びが、手応えとして感じられるようになったのは、園を立ち上げて3年がたった頃だった。

園長先生は、何も分からない新米の私に、一つ一つ丁寧に副園長の仕事を教えて下さった。その温かさが心に沁みたととき、私も、担任の先生に、丁寧に接していきたいと思った。日々失敗は数多くあるが、自分色の副園長を邁進している。

副園長として心がけていること。「いつもポジティブに生きる。今ある自分の状況を、周りの人との関わりの中で大いに楽しむ」。これからも、常に新しい風を探し感じて歩んでゆきたいと考えている。

指定討論者 上中 修

今年、幼稚園教師23年目に入った。小学校教師を志していたが、新設大学に附属幼稚園が創設されたので来ないかとの誘いを受けて赴任したのが23年前。試験はなく、面接だけという採用条件に飛びついた。

当時は幼稚園の世界に男性はほとんどいなかった。そのため「さすがは男の先生、ダイナミックな保育ね」「やっぱり女性とは違って大局的な見方ができる」とよく言われた。しかし、ダイナミックな保育とは言い方を換えれば雑な保育のこと。大局的な見方とは、細かいことに目が行き届いていないこと。しかも新設園ということで、研修制度は何もなかった。さらに、異動がなく、結局19年間同じ幼稚園に勤務し続けた。その間、園のメンバーはほとんど同じ。

10年目くらいに「俺は男の先生ということでちやほやされてきたが、このままでいいのか。一般的な幼稚園教諭と比べて基本的な保育技術がかなり劣っているのではないかと気づいた。そう気づいて「反省」はしたが、以来同じ「反省」をずっと繰り返している。

指定討論者 梶原 理絵

私は、今年保育者二年目になる。一年目は、まず何をしたら良いかが分からず、幼稚園の一年の流れを把握することで精一杯だった。そして保育者二年目になった今も分からないことだらけで、子ども達の姿を理解できず、子ども達に押し付けた保育をしてしまうことがあり、挫折と反省の日々を送っている。しかし、私も得能先生と同じように「一生懸命している誠意は、きっと伝わるよ」と園長先生にことばをかけていただいた。今はそのことばを糧として多くの先生方に指導してもらいながら、より良い保育をしていきたいと日々勉強している。

得能先生には、二つお尋ねしたい。第一に、新幼稚園教育要領に沿った保育を、どのように「良い」と評価されるかという点。新旧どちらの保育も経験された先生に教えて頂きたい。今の保育の良さについて理解できれば、自分自身より良い保育ができるのではないかと。特に自由保育をどこまで自由にすれば良いのか悩んでおり、その点を中心としてお話し頂きたい。

第二に、どのように保護者と関われば信頼関係を築くことができるのかという点。昨年、勤務園での研究会では、「園と家庭との連携」が一つのテーマになり、多くのことを学んできた。ただ、やはり保育者になって一番困難だと感じるのは保護者との関わりである。様々な保護者、家庭に対して、どう関わっていけば良いのか、教えて頂きたい。